

ずいそう

岩手山登山雑感

廣瀬 宏一



岩手山は私の住む盛岡の北西に位置し高さ 2,038 m 日本百名山に選ばれた東北を代表する山である。別名岩鷲山とも呼ばれ雪解けの頃になると山には鷲が両翼を開いたような姿が浮かび上がってくる。日本各地の駒形山同様に、農耕の民にとっては、農作業の始まりを告げる山として崇められてきた。この山には、7つの登山ルートがある。馬返し口、御神坂口、網張・裏岩手口、焼け走り口の4つが代表的な登り口である。登り口によっていろいろに姿を変えるおもしろさが多くの人を引き付けてやまない。1998年からは火山活動のため入山禁止になった。登山は制限されもの足りない思いをしたが、今では火山情報に注意しながら全ルートとも登れるようになった。

馬返し口には駐車場もあり、早朝登り始めれば日帰り登山もできる。駐車場から登山道入口までは少しの登りがある。これを登っただけで、もう一端の登山気分になってくる。登り口には鬼又清水が自噴している。水筒に水を汲み、いざ出発。急な下りと登りの後、ずいぶん長く森の中を歩き、汗にまみれ、へとへとになり、もういいかげんいやになってきたなと思うあたりで右手に急な登り坂が現れる。これを登りきったところが一合目だ。ここまでが長い。すごく長く感じる。二合目を過ぎて少し行くと新道と旧道の分かれ目が現れる。旧道に道をとり、しばらく歩くと森が終わり急な登りの岩場に入る。足下を見ながら一步一步登り始める。

山に登ると、こんなにしんどいのにな何故来るのか、足元だけをにらんで何故登っているのかといつも思う。一步一步足場を感じながら登っていると、どんな車だっこの道を登れはしない、そのどんな車でも登れないような所を、自分の足で登っているということに不思議な思いが湧いてくる。つらいながらも足を一步、また一步と動かし続け、上に見える人の姿を目当てに、よしあそこまで登ったら一休みしよう、次はあそこまでと登っていると、いつの間にか三合目、四合目、五合目と登ってきている。

見上げると先を登っている人が米粒のように見える。あそこまではとても無理かなと思いつつも、気を取り直しては足を動かす。また、あそこまで、あそこで一休み、という思いを繰り返しながら六合目へと登っ

ていく。岩場が終わり、低木の中を通り再び森の中へ。しばらく登ると急に視界が開け、草原に出る。ここが七合目である。

また気を取り直して歩き始めると、少しして避難小屋が見えてくる。ちょうど刻限も昼時となる。山頂を望みながらの昼ごはんは実にうまい。ここには御成清水があり、避難小屋の前まで引かれている。登り口、五合目の清水もいいが、この八合目の清水は冷たくて本当にうまい。下りの時、空のペットボトルいっぱい清水を汲み、重たい思いをしながら持ち帰る。御成清水で入れたコーヒーは実にうまい。持ち帰る労を費やした者へのご褒美と密かに自認している。

いよいよ山頂間近のガレ場にアタック。急なガレ場は足を踏み出してもずり落とされ、なかなか進むことができない。疲れた気持ちと疲れた体には、これがすごく堪える。岩手山登山、最後の修行のようである。どうにか登り切ると踏み固められた火口の外輪にたどり着く。ここを左回りに山頂をめざす。点々と鎮座された石の仏様達の脇を過ぎ、最後の急坂を登りきると岩手山山頂の石柱が現れる。到着！

山頂からは視界 360 度をぐるりと見渡すことができる。これが見たくてここまで来たのだという思いに包まれる。腰を下ろし、しばらく見晴らしを愉しむ。この一時が下る力と気持ちを充電してくれるのだ。

年をとると下りは下りでまた辛い。下り続けると膝に力はいらなくなってくる。しまいには痛くて曲がらなくなり、膝がポキポキと折れる枯れ枝になったような感覚に襲われてくる。それでも歩き続けると夕焼けが美しくなる頃、ようやく馬返し口に帰り着く。衣服は汗で重たく体は本当にきつい。

朝に夕に端正な岩手山を見ていると、あんなにきつい山なのに次の休みにはまた登ろうと思っているのである。いつまで、あと一步、あと一步と登り続ける気力を奮い立たせられるのだろうか、いつまで登り切ることができるのだろうか。今年も山頂に足跡を残してきたいという思いと、人としてただ歩くという原点の確認作業のような思いが、私の山行きを支えてくれているのかも知れないと思う今日この頃である。